

猪名川河川敷利用対話集会・円卓会議

2004年3月7日(日)猪名川ウォーク総括

ファシリテーター：片寄俊秀 2003.3.31

1 実施内容

1. 参加者は78名プラス関係者、合計約100名。年齢層は8歳から86歳と幅広く、特に多かったのは比較的高齢の方々であったが、ほぼ全員が吹雪の中を最後まで歩き通した。
2. 円卓会議には、5名(川瀬丈四郎、細川幸子、熊谷晋、渡辺節子、新保満子の各氏)が参加。流域委員会からは出席依頼に応じて2名(嘉田、松本の各氏)さらに会場には細川委員、および今本委員の参加があった。
3. 会議の参加者は63名。会議のみの参加者がスポーツ関係を中心に5~6名あった。時間的に余裕があったので、会場からの発言も相当数いただくことができた。

2. 猪名川ウォークを行った意義

1. 始めて歩いた人も含め、猪名川の抱える現状について認識を新たにした。とくに参加者の多くが河川敷の水辺近くを歩いたのが初体験であったようで、新鮮な感動を覚えるとともに問題の深刻さを実感できたとの印象を、こもごも語っておられた。
2. 休日で、かつシーズン前の忙しい時期でスポーツ関係者のウォーク参加は少なかったが、会議には数名ご出席いただき意見を出していただいた。
3. 河川敷については、広大な面積にわたって人工的な利用が進んでいる実態および、それらがほぼ満杯状態で活用されている状況を参加者一同が認識できたが、「新規の利用拡大」については、これ以上は難しいであろうという認識もまた、参加者の大半が抱いた模様である。
4. しかし、自然復元を進めたとき、そこが現状のようなゴミだらけの状況になるのも困るという認識も深まった。

3. 出された主な意見とファシリテータの感想

1. ゴミだらけの現状に、参加者のほとんど全員が強く衝撃を受けたために、河川敷利用問題を論議する前に、ゴミについての意見が論議の全体を圧倒した。
2. 河川敷利用については、次のような意見が出された。

河川敷利用についてはある程度現状を容認せざるを得ない。今すぐ無理をしてスポーツ利用を排除することは現実的に不可能であろう。

大きい方針として自然復元を進める方向は堅持しつつ、出来るところからどんどん具体化して、流れに平行した「自然の回廊」(コリドー)を上下につなげていくという戦略が必要である。

しかし、一部で進められている具体的な復元の現状が、まだまだきわめて貧しい段階にあり、全体のイメージがわからない。もっと魅力的にする必要がある。

しかも、現状の自然度の比較的高い部分が、まさしく「ゴミため」の状況にあるので、それが逆に自然復元への心理的な抵抗となっている。

むしろ積極的に人工的利用をすすめて、利用者がつねに清掃活動をするという方向を確立

すべきという意見には、ゴミの山を見た目には、より説得力があった。

実際には、そういう利用者管理の仕組みを確立することも容易ではなく、着地点を見つけるためには、なお相当な論議と理論的な考察および具体的な技術や手法の開発が必要であると思われる。

現在、少子化の影響で学校統廃校が進められつつある。堤内地での「代替え施設の確保」は、河川敷自然復元へのもっとも有効な手段であり、これらの敷地をスポーツ施設に転換する方向を具体的に進める必要がある。

4. 今後の方向

1.まず、このゴミの山をなんとかしなければならぬ、ということで今回の参加者の意見が一致した。

2.そこで、「イナガワ」にちなんで、この7月17日(土)を、第一回猪名川クリーンアップ行動日として設定し、流域にお住まいの個人、団体、企業あがりの参加をよびかけ、実施することに決定。今回参加者の多くが、自ら主体的に参加するとの決意を表明された。行動の中心は住民となろうが、国、自治体などがそれを全面的にバックアップする体制をうまくつくりあげる必要がある。

3.猪名川の汚れは、一度の掃除ぐらいできれいになるほど生やさしい状況ではないので、これで成功すれば、継続していきたい。こうして、多くの人々の目が川に注がれ、意識が川に集中し、「猪名川ファン」や「猪名川サポーター」の数が増えることこそが、河川敷の自然復元を進めていくもっとも早道ではないかと思われる。

4.なお、堤内地における学校統廃合後の敷地のスポーツ施設への転換利用については、国土交通省からも当該自治体等に働きかける必要がある。しかし、実際問題としてこれを実現するにはさまざまな障害がある。例えば、すでに学校敷地購入段階で文部省(現文部科学省)の補助金が出ていれば、都市計画公園への転換には補助金の二重どりという問題が生じることも考えられる。これらのバリアーをいかに克服するか。議論を深めるとともに、なんらかの行動が必要な段階に来ている。